

出生率を伸ばした 小さな村の大きな挑戦

●はじめに

我が下條村は、長野県の最南端、南信州下伊那郡のほぼ中央に位置し、飯田市街や中央道飯田インターから、車で20分のところに位置する人口4200人余の小さな村です。

●職員意識改革、人員削減

私が村長に就任いたしましたのは平成4年。バブル景気が冷め遣らぬ頃でありましたが、村の人口は、櫛の歯が抜け落ちるように減っておりまして。地域にとって、また、地域の企業にとつても人口が減少する、特に若者が減っていくということは、致命傷であります。何としても若者が定住する村づくりをしなくてはと思ひ突き

進んでまいりました。まず取組んだのが、職員の意識改革でした。いわゆるお役所仕事といわれ、スローモーションの掃帚の一掃です。厳しい民間企業へ職員全員を研修に出しました。意識



村民の協同作業による道路工事



村が資材を支給し、地域住民自らが施工する道路整備

が変わると職員はそんなに要りません。最大59人いた正規職員が、今では34人。類似団体の53%位の人数でやっております。

●資材支給事業

次に私が考えたのは、住民の何かという行政頼みをする風潮を、払拭することでした。そこで始めたのが資材支給事業

業です。

これは、簡単な村道・農道・水路整備などを、役場から生コンクリートなどの材料を支給するだけで、後はそれぞれの地区の皆さんが、自ら出役して工事を行うというものです。

この資材支給事業を始めて15年。財政的にも助かりますが、それ以上に村民が自ら考え、額に汗すれば、地域は見違えるように良くなるのだ、という意識改革になったのが、何よりの成果です。

●合併処理浄化槽の取組み

下水道整備も、合併処理浄化槽一本で行いました。これも村の財政の健全化に、大きく寄与しております。

●財政指標の好転

こうした取組を行った結果、財政指標が良くなってきました。下條村の財政力指数は、平成18年度0.227。長野県内でも低いほうです。一方、起債制限比率



長野県下條村長
伊藤 喜平



村の中でもひとときわ目立つ若者向け村営住宅

は、平成18年度3・0になり、ここ数年県内でトップクラスの低さです。また、平成17年度から算定されることになった実質公債費比率でも6・0と、これも県内第2位となっています。

●若者定住促進で人口増を実現

財政指標が好転してきた中で、人口を増加する政策に取り組みました。若者定住集合住宅の建設です。1棟12戸が標準の建物、家賃は2LDK(約20坪)で月3万6千円。民間アパートの約半額です。平成18年度までに10棟124戸を建設しました。入居者の条件は、若者で子どもがいるか、これから結婚する人に限って、

入居していただいております。こんな住宅政策のおかげで、人口が増加する村になりました。

●合計特殊出生率が上昇

0歳から14歳までの若年人口率は、17・2%と県内1位です。また、1993～1997年当時1・80だった下條村の出生率が、1998～2002年は、1・97に上昇。さらに村の試算では、2003～2006年は、2・04と上昇したのです。

また、子育て支援策として、平成16年度から中学生までの医療費を無料化しました。これは若いお母さん達に大変喜ばれております。

●魅力ある村づくり

若者に定着してもらうには、どうしても文化的な魅力をもった村づくりをしなければと、村立図書館、医療福祉保健総合健康センター、本格的文化ホールの建設など、小さな村にしては、ちよつと贅沢だと思ふ施設を整備しました。この様に、村のグレードをアップすることにより、若者が喜んで住んでいただけるような村になっていると思ひます。



増え続ける村立保育園児。子どもの歓声が聞こえることが地域の活力を生み出している

●終わりに

小さな町村は、何より財政の健全化を、先に考えなければなりません。行政をどうするかは、その後の話で、発想を逆にしたと、コスト意識の希薄さから、行政がいたずらに肥大化し、つちもさつちもいかなくなってしまうます。

下條村の人口が増加したのも、出生率が伸びたのも、健全財政を最優先させながら、村民みんなが参加する魅力ある村づくりを、地道に進めてきた結果だと思っております。

